

高槻市文化財調査報告書第9冊

奥坂古墳群発掘調査報告書

1976年

高槻市教育委員会

序

本市には、史跡今城塚古墳、史跡嶋上郡衙跡附寺跡をはじめ、弥生時代の代表的な遺跡である安瀧遺跡など数多くの遺跡・古墳が存在し、研究者のみならず一般市民の方々からも深い関心を寄せられています。

これらの貴重な文化財を保存保護することは我々に課せられた重要な責務であります。近年の土地開発等によって少なからず文化財の保存保護が困難になっています。

このような状況のもとで本市教育委員会は市民各位の御協力を得て、これまで文化財の現状保存や記録保存に最大限の努力をまいりましたが今後とも文化財の保護に万全を期する所存であります。

ここにまとめました奥坂古墳群の調査報告は高槻市立仮称第二磐手小学校の建設予定地として計画された地区につき、工事に先立ち発掘調査を実施したところの調査報告であります。

なお、調査および調査報告書の刊行にあたり御協力をいただいた関係各位に心から感謝の意を表します。

1976年3月

高槻市教育委員会

教育長 平井 正吾

例 言

1. 高槻市教育委員会は高槻市別所本町30-3他に建設を予定された仮称磐手第2小学校の建設に先立って、予定地内に存在する奥坂古墳群の発掘調査を実施した。本書はその調査報告である。
2. 調査は昭和50年11月5日から12月25日まで実施した。調査には高槻市教育委員会埋蔵文化財調査センター技術吏員橋本久和が従事した。
3. 出上品の整理と本書の執筆は橋本が行なった。なお、出上品は埋蔵文化財調査センターに保管している。
4. 本書に掲載した遺物写真の番号は、実測図の番号と同じである。

目 次

1章	遺跡の位置と周辺	1
2章	調査経過	2
3章	遺 構	4
	1. A 5号墳	5
	2. A 6号墳	6
	3. A 7号墳	7
4章	遺 物	8
	1. 須 恵 器	8
	2. 鉄 製 器	9
	3. そ の 他	10
5章	結 語	10

図版・挿図目次

- PL1 a. 奥坂古墳群遠景(東から)
- b. 奥坂古墳群遠景(南から)
- PL2 a. 調査区全景(西から)
- b. 調査区全景(東から)
- PL3 a. A 5号墳石室(南から)
- b. A 5号墳石室(北から)
- PL4 a. A 5号墳全景(北から)
- b. A 6号墳全景(東から)
- PL5 a. A 7号墳濠(北から)
- b. A 7号墳濠内墓壇(北から)
- PL6 遺物写真
- PL7 奥坂古墳の遺物(参考資料)
- PL8 奥坂古墳の遺物(参考資料)

図1	位置と周辺	1
図2	調査地区測量図	3
図3	A 5号墳石室実測図	4
図4	A 5号墳遺物出土状況実測図	5
図5	A 5号墳断面実測図(東西)	6
図6	A 5号墳断面実測図(南北)	6
図7	A 6号墳実測図	6
図8	A 7号墳実測図	7
図9	須恵器実測図	9
図10	鉄製品実測図	9
図11	土師器、黒色土器、弥生式土器実測図	10
図12	古曽部古墳群出土須恵器実測図	11

第1章 遺跡の位置と周辺

高槻市北方の山塊に源を発する桧尾川が成合の谷間をぬけて平野部に出て東方に流れを大きく変える地域には弥生時代から中世にかけて遺跡が多く存在する。(図1)

まず平野部には北摂最大の弥生時代集落であり中世まで遺構が確認されている安満遺跡がある。桧尾川をはさんで東方の安満山には延暦年中に参議阿倍是雄の創建で安満寺と号し坊舎19があったという金龍寺があり、この金龍寺境内にあたる南へ派生する尾根上には横穴式石室を有する古墳が30数基確認されており安満山古墳群とよばれる。桧尾川の西の丘陵上の現第8中学校校内には弥生後期の大集落跡と古墳時代中～後期の方墳群で構成された紅苺山遺跡・古墳群があった。この紅苺山遺跡に隣接した西方の尾根上に奥坂古墳群がある。この尾根は東洋紡績株式会社研修所の裏手にあたる。これらの尾根が結節する丘陵の頂部は標高91mを測り通称羅王山とよばれ、雲峰神社という小祠があり安閑天皇を祀る。この小祠の下には横穴式石室の石材が露出していて羅王山古墳とよばれている。

この羅王山の下方の古曾部一帯は平安時代には都の貴族の別荘や隠棲地があったと伝えられている。

36歌仙の一人で宇多天皇の寵愛を受けた伊勢姫の旧居という伊勢寺や、同じく歌人

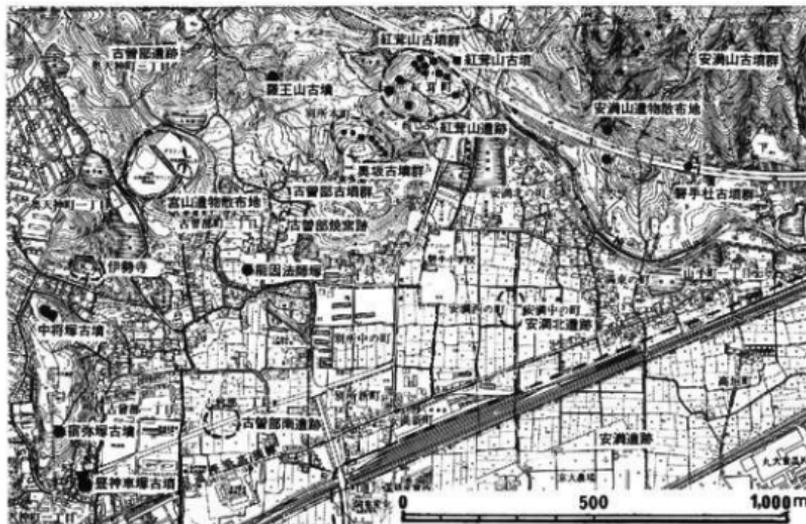


図1. 位置と周辺

として知られる能因法師の隠棲地跡や塚が残っている。さらにやや西方の天神山丘陵には銅鐸の出土をみた天神山遺跡や昼神車塚古墳などがある。

その他に遺物散布地など枚挙にいとまが無い程多くの遺跡があり、このような豊富な考古学的環境の中に奥坂古墳群があるわけである。

第2章 調査経過

高槻市の東北部にある古曾部・別所・安満地域は近年まではどかな農村風景が展開し、丘の上にたてば淀川のむこうに生駒山系が望見でき平安時代の貴族の隠棲地にふさわしいところであった。しかし最近の高槻市の人口急増現象はこの周辺をも巻きこみ、水田を埋めため、山肌を崩してマンションや分譲住宅が建ち並ぶようになった。これに伴い、この地区にも学校建設が必要となり46年に第8中学校が建設されたのにつづき第8中学校に隣接した76,000㎡の山林を切り開いて(仮称)磐手第2小学校および(仮称)府立高槻方面高等学校の建設が計画された。

この周辺では、かつて名神高速道路建設に際して紅茸山古墳の調査が行なわれており、(註1)第8中学校建設に先立って予定地が全面発掘され弥生時代後期の集落跡や古墳群が明らかにされている。(註2) この紅茸山遺跡調査に際して周辺の遺跡分布調査を行なったところ東洋紡敷地内に数基の古墳が発見されている。また、正確な位置は不明であるが東洋紡研修所構内から鏡や玉類を出土した古墳があったと伝えられており、これが一般に奥坂古墳と呼ばれている。

今回の磐手第2小学校建設予定地は分布調査で発見された古墳のすぐ西隣にあたる。このために、50年2月12日から2月28日まで遺構確認のために試掘調査を行なった。調査の結果、小型石室を有する古墳一基が発見された。同時に小学校の北隣に建設される予定の府立高校用地内についても踏査を行なったが遺構らしきものは何も発見されなかった。後日、小学校予定地内の調査時にも試掘を行なったが同様だった。

確認調査の結果に従って関係各方面と協議の結果、小学校建設予定地の南側斜面一帯の約3000㎡について発掘調査を実施することになった。

調査は50年11月5日から12月25日まで実施した。調査には高槻市教育委員会埋蔵文化財調査センター技術吏員橋本久和が従事した。

最後に、調査に際して協力をいただいた高槻市土地開発公社をはじめとする関係各位に感謝の意を表します。

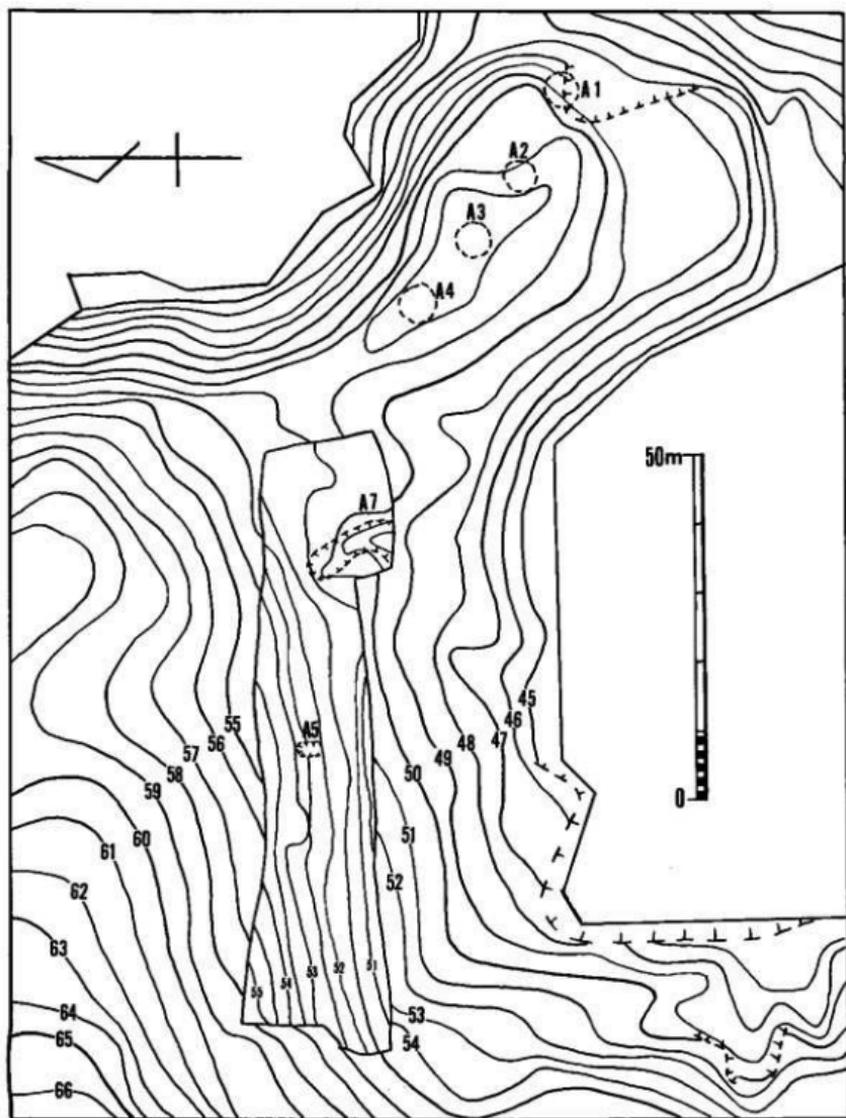


图2. 调查地区测量图

第3章 遺 構

羅王山から南東に派生する尾根の緩斜面上に発見され、隣接する紅茸山遺跡のような弥生時代の集落跡はまったく発見されなかった。

今回の調査で発見された遺構はほぼ完全な小型石室を有する方形墳1基（A5号墳）と破壊されて残存する小型石室の石材（A6号墳）、および濠内に墓壙を有する方形墳の濠の一部（A7号墳）である。以下各古墳ごとに概要を記してみる。

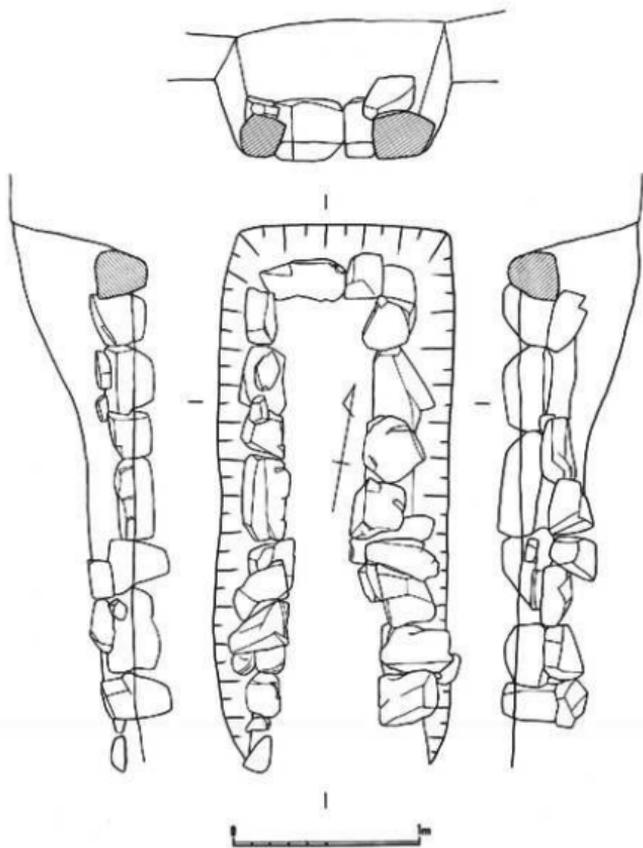


図3. A5号墳石室実測図

1. A5号墳

A5号墳は羅王山から南東にむけてのびる尾根の緩斜面上に築かれていて、調査以前には墳丘らしきものは確認できなかった。

主体部後方の断面では漆跡を認めた。掘り方（墓壙）奥壁部から北へ3.3mの地点で地山の赤褐色土を約30cm掘さくした漆の外縁が認められ、主体部を中心に東西に6.5m続いていた。この漆の外縁から内側へ褐色土まじりの黄色土がレンズ状に幅1.8m、深さ30cmで堆積していた。

主体部と直交するように設けた断面を観察すると腐殖土（5～10cm）黄色土（30cm）黄褐色土（15cm）赤褐色土（地山）と堆積している。この断面では漆らしきものは確認されなかった。石室の中心から西へ5.2mの地点で赤褐色土の上面に礫を含む黄灰色土の堆積が認められ、この地点で黄褐色

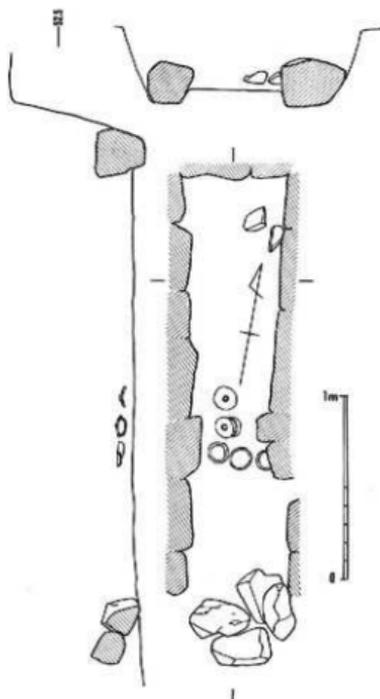


図4. A5号墳遺物出土状況実測図

土の堆積はなくなっている。この黄灰色土は漆とは認められず西方に堆積がつづいている。また、石室の東方では認められない。この断面で認められた黄色土は盛土の下部であろうが、漆跡が認められないので墳丘内外の区別がつきにくい。(図5・6)

後述する石室の掘り方は全長約3mで、奥壁部掘り方から漆の外縁まで3.3mを測るのでA5号墳は一辺4.5mの方形墳であったと推定される。なお、周濠は地山を浅く掘さくして北側のみに設けられたと考えられる。奥壁後方でも黄色土の堆積が観察され盛土の下部とおもわれる。斜面に築かれたために盛土は流出してしまったのだろうが、墳丘規模から推定しても元来低い盛土しか施工されなかったのだろう。

主体部はいわゆる小型横穴式石室である。赤褐色土層の地山を長さ約3m・幅約1.3mの範囲で長方形の掘り方（墓壙）を掘りこんで石室を構築していて、掘り方は奥壁部で深さ60cmを測り玄門付近では20cmを測る。(図3)

掘り方壁はやや傾斜していて奥壁部の底で幅は97cmを測る。

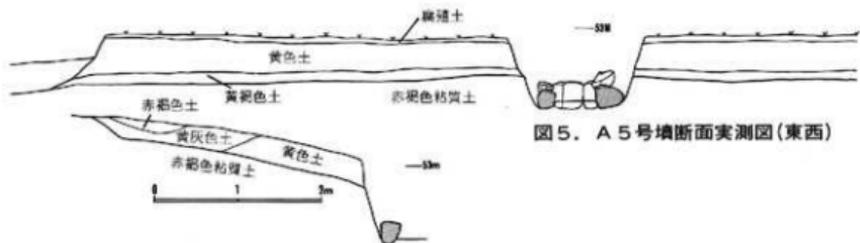


図5. A5号墳断面実測図(東西)

図6. A5号墳断面実測図(南北)

周壁の遺存状況は西壁ではほとんどが最下段しか残っていない。

東壁は第2段まで残っているが中ほどで側壁が崩れて内側にかたむいている。

石材は割石を使用して縦づみが基調である。側壁では小さなものを使用しているが、奥壁ではやや大きな石を一方におき、側壁との間をもう一つの小さな石で補っている。

周壁はいづれも床面から10cm程度下まで埋められているが、玄門はその名にふさわしく小型であるが縦長のものを使用し、他のものより少し深く埋めてある。

天井石は発見されなかった。(PL. 3・4)

石室の規模は内縁で長さ2.25m、幅は奥壁部で0.55m、中央部では側壁が崩れているので約0.4mを、玄門部では0.5mを測る。高さは最高0.4mである。床面には敷石を認めなかったが、奥壁部片隅で棺台と思われる石が2個検出された。石室入口付近には閉塞石らしい人頭大の塊石4個が置かれていた。また石室前庭部には、こぶし大の石がちらばっていたがこれも閉塞に使用されたのだろう。方向はN-10°-Wである。

遺物は石室中央部で須恵器蓋杯6個が、墳丘部の黄色土層中から鉄製釘の破片数個が発見されている。(図4)

2. A6号墳

当初、表土直下で発見されたので、石室が破壊されて散在する石材かと思われたが石材の南東側の面が面取りされて石室内側に向くように並べられているので破壊された石室の残存として報告しておく。(PL. 4)

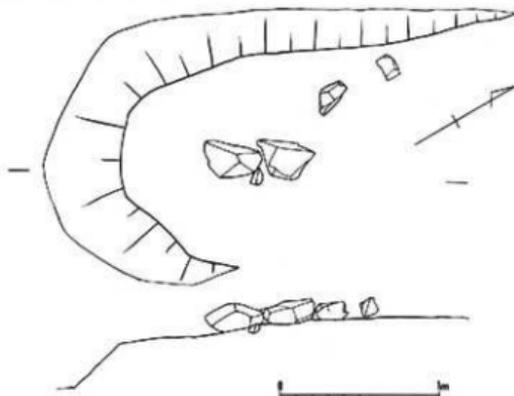


図7. A6号墳実測図

A 5号墳の西隣に位置し石室の最下段石が2個並んでいるのみで、掘り方あるいは石室底面の石敷等はまったく発見されなかった。石材はA 5号墳とほぼ同程度の割石を使用しているので規模もA 5号墳と同程度であろう。周濠や遺物についてはまったく発見されなかった。なお、方向はN-32°-Eである。(図7)

3. A 7号墳

調査区東南部で発見された方形墳であるが、壁ぎわであるために周濠の一部しか調査できなかった。(PL. 5)

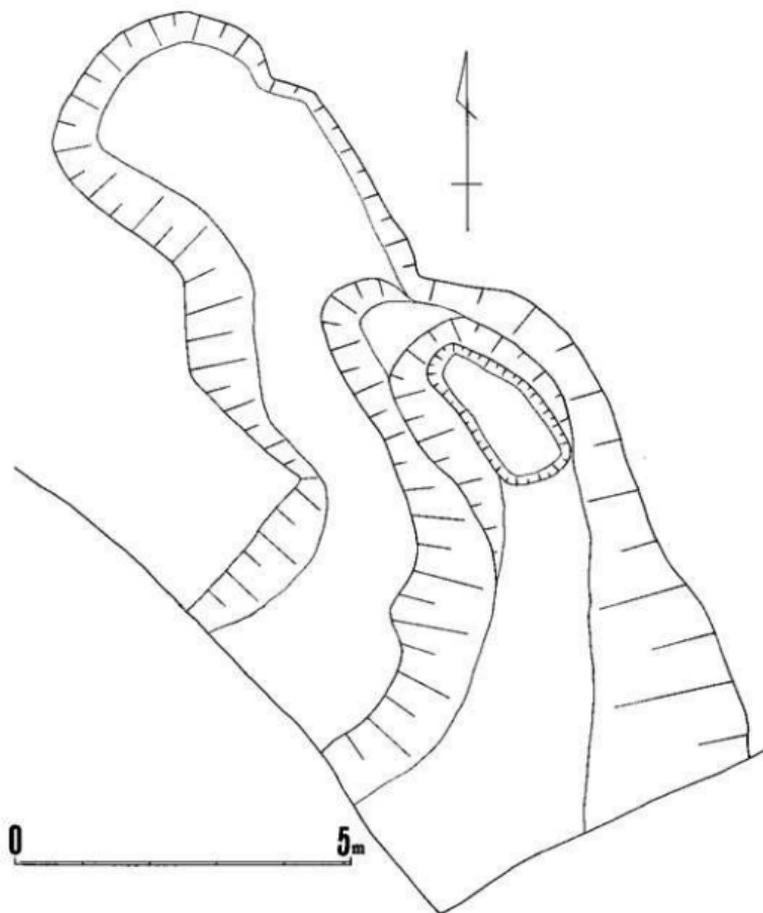


図8. A 7号墳実測図

この古墳についても盛土らしきものはまったく認められず、斜面のために流出してしまっただろうか。周濠は地山である赤褐色上（小石を含む）を掘さくして形成されていて、斜面下方にむかう程深く掘さくされ1.15mを測る。斜面上方の浅い所で0.3mを測る。濠内には上から黄灰色土、黄色土が、最下層に褐色土が推積していた。

周濠は調査区南端でほぼ直角に西南に曲がっていて、方形墳の東側の濠と周濠の東南隅内側を調査したことになる。濠幅は東で約3.5m、南東部では6m以上になるものとおもわれる。東周濠の内縁は約6mを測る。濠幅に比べ濠の長さが短いがおそらく墳丘全体をとり囲んで濠は掘さくされておらず、斜面下方のみを掘さくしているようである。このために墳丘の規模をここで報告することができない。

内部主体については西方にトレンチ等を設けて発見を試みたが、濠の発見されたやや西南の調査区外で斜面が崩壊した形跡があり、このためか内部主体はまったく発見されなかった。

墓塚（濠内）

濠底の外縁で墓塚が1基発見された。ほぼ方形で長さ2.8m、幅1.2m、深さ0.15mを測る。内部で幅0.5mの木棺の痕跡らしきものを発見した。墓塚を掘さくする際に周濠の外縁を東側へ削った形跡が認められ、この墓塚は主墳より後のものであり主墳に従属する関係におかれた人物の埋葬施設であろう。（図8）

なお、この墓塚に埋置された木棺に使用されたとおもわれる鉄製釘の破片が近辺から発見されている。この他に遺物らしきものは発見されなかった。

第4章 遺物

1. 須恵器

A5号墳より杯・杯蓋が3個づつ検出されている。（図9.1～6）このうちセットと認められるのは1と4だけで他は質・色がはなはだ異っている。

杯蓋はいずれも宝珠つまみがつき直径約12cmのもの（1.2）と11cmのものがある。前者は宝珠つまみの端部は鋭い稜角を示し、後者はつまみが低くやや小型である。1は灰白色で土師質を呈し他は青灰色で質は堅微である。

杯身は皿状のものでいずれも直径11cm程で深さも4cm前後である。4は焼成不良で灰白色を呈し、細砂粒を多く含む。底部はいずれもヘラ削りで調整されている。この他に調査区全域から須恵器破片が検出されているが、量はビニール袋・杯程度である。

ほとんどが細片であるが甕の胎部で内面に
青海文を施したものとや糸切り底の蓋などの破
片があり時期は一定していない。(PL. 6)

2. 鉄製品

2か所から釘が18本出土している。A 5
号墳の墳丘らしい黄色土から10本(図10・8~
17)とA 7号墳の漆内墓壁の付近から8本
(図10・1~7)である。いづれも埋葬当時のま
ま発見されたのではなく数量や使い分けは分
らない。(PL. 6)

A 5号墳のものは石室が攪乱されて石室
外に出たのであろう。頭部が残るもので頭部
が円頭形で径1.6cmを測るもの以外はすべて
頭部を一方へ折りまげた形式である。ほぼ完
全なもの(8)で長さ9.3cm、厚さ0.7cmを測る。
断面はいづれもほぼ正方形であり先端は鋭ど
く尖っている。

A 7号墳のもので頭部が残るものはいづれも頭部を一方に折りまげている。最大の
もので長さ10cm、厚さ0.8cmを測り断面はほぼ正方形である。先端は鋭く尖っている。

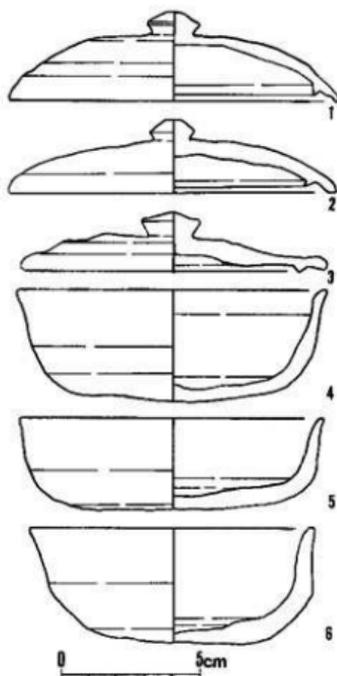


図9. 須恵器実測図

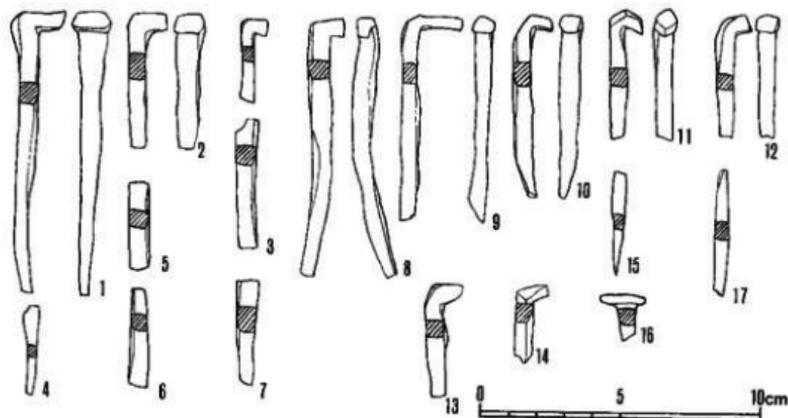


図10. 鉄製品実測図

3. その他の遺物

今回調査した地区から出土した遺物は全体でも整理箱一杯で特筆すべきものはないが、弥生式土器、黒色土器、土師器、埴輪の破片がみうけられる。

土師器(図11-1)は赤褐色をし堦に付いた高台とおもわれる。黒色土器(図11-2)は内面および口縁部外側が黒色の堦である。底に低い高台がついている。弥生式土器は後期の底部がややあげ底気味のものである。(図11-3)

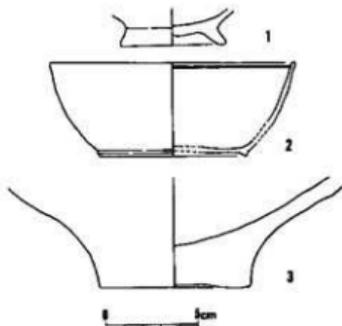


図11. 土師器、黒色土器、
弥生式土器実測図

第5章 結 語

今回の調査でA 5号墳はいわゆる小型の横穴式石室を主体部とする古墳であることがわかった。未調査のA 1～4号墳についても踏査した限りでは埴丘はあまり明瞭ではなく、A 5号墳に類似する規模・構造を有するものとおもわれる。

高槻市内でこのような小型横穴式石室を有する古墳としては塚原古墳群中のB群およびN群(註3)、上の口古墳群があげられる。(註4) また、石室を有するかどうか不明であるが古曾部古墳群もある。(註5) A 5号墳の年代は出土した須恵器からみて7世紀中葉とおもわれるが塚原古墳群のB群やN群、上の口古墳群もほぼ同時期と考えられている。A 5号墳では天井石が架構されずに板などで蓋がされたとも考えられる。(註6) また、元来埴丘として特に盛土を施さずに石室をおおう程度のためかまりがあったにすぎないだろう。(註7) このような小型石室墳では木棺を一基埋葬すると追葬することは極めて困難であり、単次葬墓といわれ終末期古墳の典型とされている。

7世紀中葉にこのような小古墳が築かれる歴史的背景には、大化の薄葬令が思いうかぶが、水野正好氏は冠位十二階とならんで造墓への強力な規制となった「推古喪葬令」とよぶべき造墓規制令があったと推定されている。(註8) 奥坂古墳群もまたこのような規制をうけて築かれたものであろう。この時期には、有名な阿武山古墳(註9)のように唯一人の人物の為に立派な墓室が用紙されるという現象が現われる。古墳終末期には、たとえ小古墳であっても古墳を築くことができるのは朝廷と何らかの

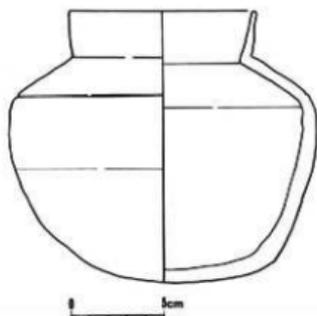


図12. 古曾部古墳群出土須恵器



関連がある限られたものと考えられる。

このような個人を対象とした単次葬墓の築かれる背景には前述した薄葬令なり喪葬令があったとおもわれるが、このことは推古朝以来中央集権化をめざし、律令体制への踏石を築きはじめた歴史的背景がうかがえる。では、この奥坂古墳群あるいは隣接する古曾部古墳群の被葬者についてであるが、簡単にのべて安瀾遺跡を中心とした地方豪族と推定される。単に奥坂のみならず付近の遺跡・古墳を考えるうえで安瀾遺跡の存在を無視して考えることは不可能である。かつては、安瀾遺跡は弥生時代集落として有名であったが、最近の調査で単に弥生時代のみならず古墳時代から中世にかけてその存在の重要性が認識されるに至っている。

この安瀾遺跡の分材とでもいうべきものが古曾部南遺跡や安瀾北遺跡であり、平安時代に貴族の別荘などが営まれるのもこうした背景があるからだろう。(註10)

時期が前後するが、隣接する尾根に展開する紅茸山古墳群や奥坂古墳についても言及すると、今回調査したA 7号墳は、濠内に墓壙が設けられていることや濠幅が広いことなどからA 5号墳よりも、同じく濠内に墓壙を有する紅茸山C 3号墳に類似している。ただC 3号墳の濠内の墓壙には割竹形本棺が置かれていて、A 7号墳の濠内墓壙付近から釘が出土しているので年代的には差があるようである。このC 3号墳は直径約18mの円墳で内部主体から内行花紋鏡を出土している。これを中心に紅茸山古墳群には周囲に濠をめぐらした方墳が約10基知られている。規模は一辺6～9m位でほとんどが中央に木棺を一基直葬している。

かつて調査された紅茸山古墳(C 2号墳)もこのうちの一基であるが規模は大きく一辺18mの方墳である。(註11) この紅茸山古墳群は5世紀後半から6世紀にかけて

のもので3つのグループに分けることができる。

図版に参考資料として遺物を掲載した奥坂古墳は、土地の古老の話では東洋紡研研究所の一隅に存ったらしく昭和初期に研修所建設に際して破壊されたらしく鏡や剣・勾玉などが出土したという。その一部は現在東京国立博物館に保管されている。奥坂古墳の時期は紅苜山古墳群よりやや古いものとおもわれる。(PL. 7・8)

このように別所の一角にある羅王山から東方にのびる尾根は古墳時代中期には奥坂古墳や紅苜山C 3号墳を中心として数系統の古墳が築かれ、また終末期にも限られた有力家族の墓が築かれた。この尾根は古曾部・別所地域を支配した豪族の墓地として永く使用されたことがわかる。

(註1) 高槻市文化財調査報告書第2冊「紅苜山及岡本山東地区遺跡の調査」1966年 高槻市教育委員会

(註2) 高槻市史第6巻 考古編 1973年 高槻市

(註3) 高槻市文化財調査報告書第4冊「塚原古墳群の研究(1)」1968年 高槻市教育委員会

(註4) 高槻市史第6巻 考古編 1973年 高槻市

(註5) 古曾部古墳群は1度羅王山から南へのびる緩斜面上に発見された。奥坂古墳群のすぐ西側の斜面で、すぐ付近には近世の古曾部焼の窯跡が残っている。(図1)

74年2月に付近一帯の造成工事中に須恵器(図12)の破片が発見されたという連絡をうけて、橋本が現地を調査したところ、わずかに残っている古墳の墳丘らしきものを発見した。1度造成現場の端であったために断面を測定しただけである。

断面も墳丘の中軸でないために正確な規模は不明であるがせいぜい5~6m程度の円墳とおもわれ、周囲に1~1.5m、深さ0.2m程度の濠がめぐっていたらしい。付近からは破壊された石室の石材らしきものも見あたらなかったので木棺直葬かとおもわれる。

発見された須恵器は口径10cm、最大口径16.5cm、器高14.7cmを測る甕で、口縁部から肩部にかけて自然袖がかかる。底部はヘラ削りで整えられている。

この古墳が発見された時は造成工事がほとんど終了した段階であったために、この他に古墳があるかどうかは不明であるが隣接する奥坂古墳群の例からみても他にまだまだ存ったと考えた方が妥当であろう。

(註6) 兵庫県宝塚市長尾山古墳群雲雀山東尾根支群中の小型横穴式石室の調査でも同様のことが考えられている。論奥終末期古墳 1973年

(註7) 塚原古墳群N群では調査以前に踏査したところではせいぜい数十cmのたかまりのみみられた程度である。

(註8) 水野正好「群集墳と古墳の終焉」古代の日本 5

(註9) 「摂津阿武山古墳調査報告」大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告書第7輯 大阪府 1936年

(註10) たとえば、14世紀頃の安濃荘は泉室領富林寺分安満庄、木工床安濃助旨田、春日社領安満庄にわかれていたと推定され、京の貴族との関連が強かったことがうかがわれる。

(註11) 高槻市史第6巻考古編 1973年 高槻市
高槻市文化財調査報告書第2冊「紅苜山及岡本山東地区遺跡の調査」1966年 高槻市教育委員会

四 版



a. 奥坂古墳群遠景(東から)



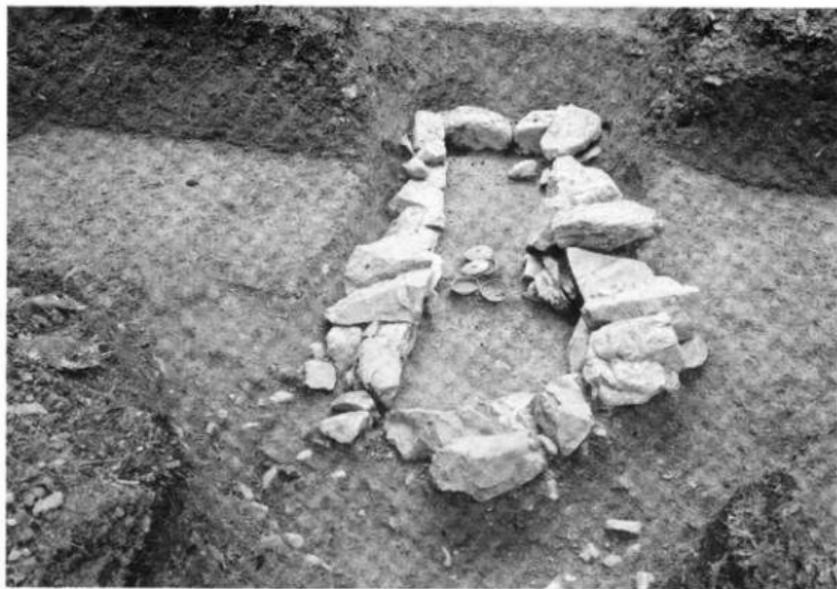
b. 奥坂古墳群遠景(南から)



a. 調査区全景(西から)



b. 調査区全景(東から)



a. A 5号墳石室(南から)



b. A 5号墳石室(北から)



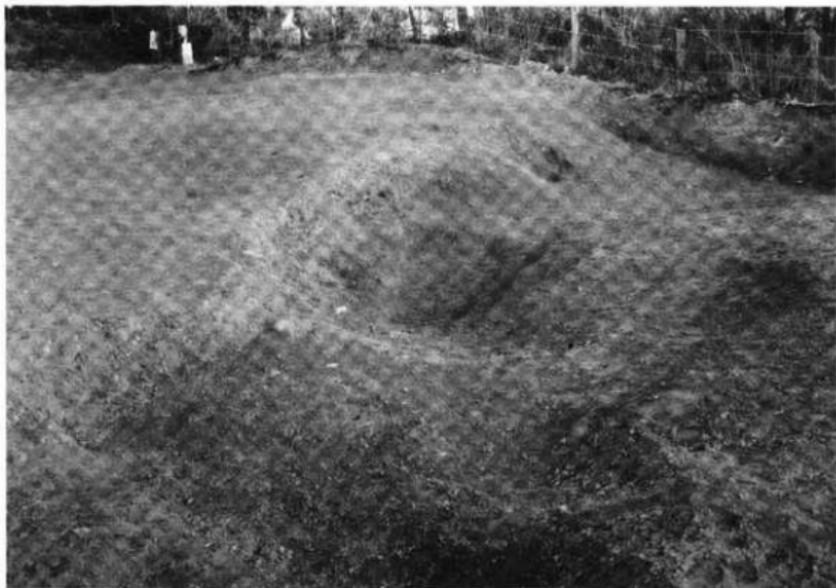
a. A 5号墳全景(北から)



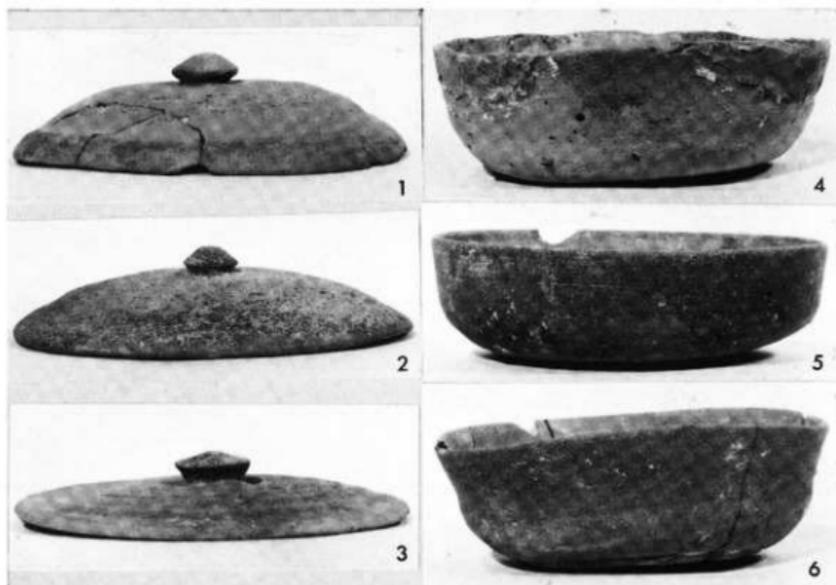
b. A 6号墳全景(東から)



a. A 7号墳濠(北から)



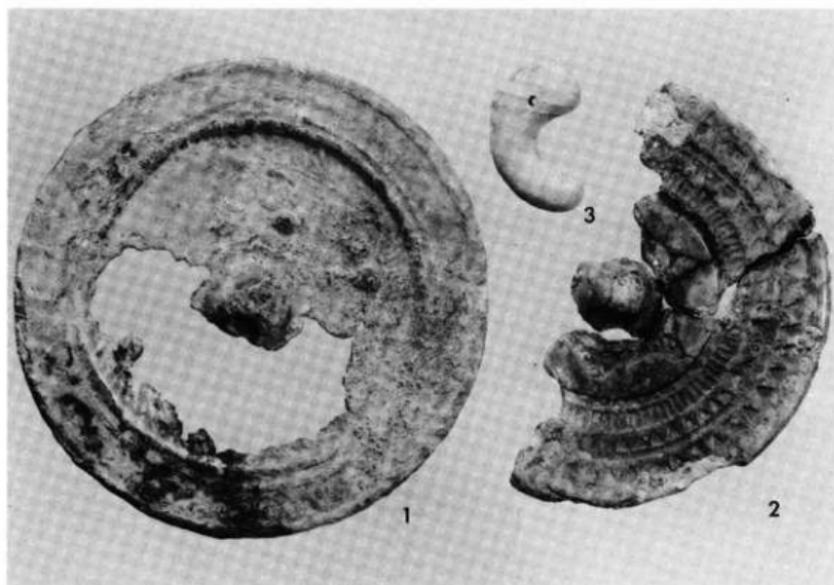
b. A 7号墳濠内墓塚(北から)



a. A 5号墳出土須恵器



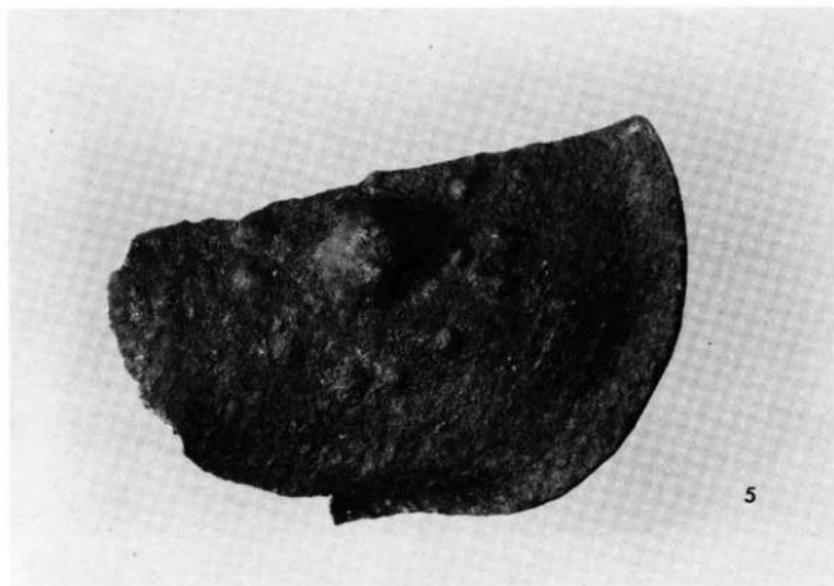
b. A 5・7号墳出土鉄製品



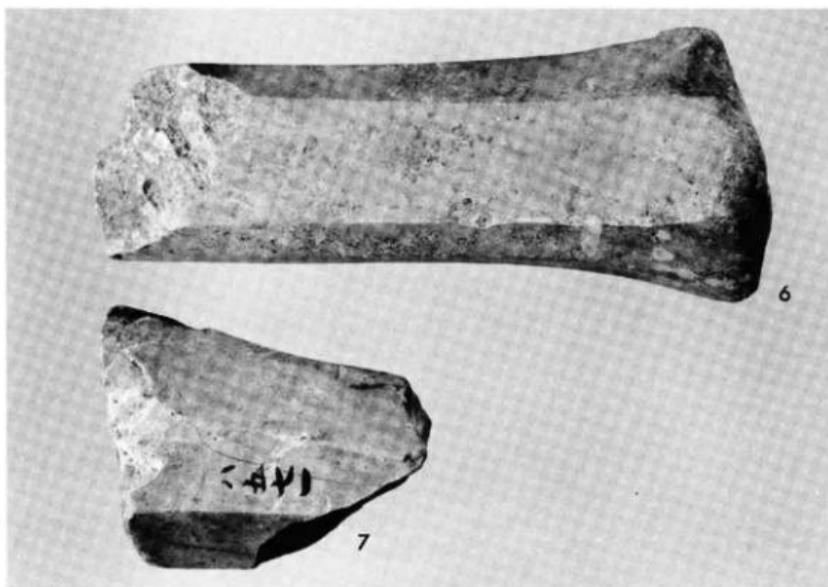
a. 奥坂古墳の遺物 変形神獸鏡(1)、内行花文鏡(2)、碧玉製勾玉(3)、 径1)9.4 (2)8.6 長(3)3.0



b. 奥坂古墳の遺物 四獣鏡(4) 径10.1



a. 奥坂古墳の遺物 変形神祇鏡(5) 径11.9



b. 奥坂古墳の遺物 砥石(6・7) 約1号

高槻市文化財調査報告書第9冊

奥坂古墳群発掘調査報告書

1976年3月

発行者 高槻市教育委員会
高槻市桃園町2番1号

印刷者 昭文堂印刷株式会社